

## 13-1 嚥下障害（えんげしょうがい）

摂食嚥下障害とは、「摂食障害」と「嚥下障害」に区別される。「摂食障害」すなわち食物を認識して口の中に取り込み咀嚼するまでの過程における障害は、口腔内の問題や精神的な問題も含めたさまざまな要素が関与している。ここでは嚥下（のみ込み）固有の障害としての「嚥下障害」について解説する。

主な症状	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 本人がのみ込みにくい、のみ込めないと訴えればわかりやすいが、高齢者ではこのような訴えがない場合が少なくない。</li> <li>● 食事の際のむせ・せき・せきこみ、食事の後にのどがごろごろいう、食事に時間がかかるようになる、食事で疲れる。このような症状が嚥下障害をきたしているサインの場合がある。</li> <li>● 体重減少や、発熱・肺炎などが嚥下障害により引き起こされている可能性がある。</li> </ul>
------	---

生活上の留意点	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 上記のような症状に気付くのは、家族を含めた介護者であることが多い。このため介護者はこのような症状があれば嚥下障害が起こってきているのではないかと疑うことが重要である。</li> <li>● 嚥下障害が疑われた場合、まず大切なことは、なぜのみ込みにくくなったのかその原因を検索することである。嚥下障害の原因を調べず、安易に食物形態を変更することはよいこととはいえない。このようなことでかえって全身状態を悪化させたりすることもある。またのどの癌などが嚥下障害の原因になっていることも珍しいことではない。</li> </ul>
---------	---

ケアマネジメントのポイント	<p>＜支援者の留意点・視点＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● これまで嚥下障害がなかった場合は、上記で述べたような症状がおこってきていないかどうかということに留意する。</li> <li>● あらかじめ嚥下障害がある方の食事介護の留意点は、その方の嚥下障害に対する理解と食事を含めた介護の工夫などが挙げられる。さらに高齢者では全身状態の変化や認知機能の変化に伴い、容易に嚥下状態が変化（悪化）することに注意が必要である。</li> </ul> <p>＜食物形態の工夫・食事介助のポイント＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 十分に咀嚼された食物塊が素材としては最もスムーズにのみ込める。このため口の中でよく噛むことが大切である。よく噛まれた食塊は食物と唾液が混じりあってドロットしているのでのみ込みやすい。一方、食塊が形成されにくい口の中でバラけてしまうようなものは嚥下障害がある方の食事には適さない。</li> <li>● 食事介助のポイントとしては、可能であればリラックスした座位をとること、座位が不可能でも可能な範囲でよいのでベットをギャッジアップし、少しあごを引いた状態をとる方がよい。あと食事の一口量も大切で本人が欲しがらるといって量が多すぎることは問題である。</li> </ul> <p>＜介護サービス事業所・医療関係者との連携のポイント＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 誤嚥予防 主治医、言語聴覚士 歯科医師や歯科衛生士と連携しケアやリハビリテーション、口腔ケアが適切に実施できるマネジメントを行う。</li> </ul>
---------------	---